

れき じん

となん歴史民だより vol.13

Morioka tonan history and folklore museum

平成19年12月26日発行

発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 TEL019-638-7228

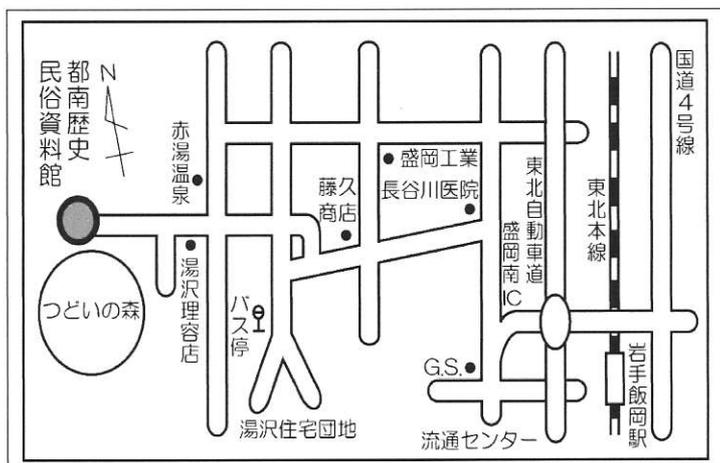


研修会「史跡・文化財巡り」の鹿妻穴堰見学風景

— もくじ —

- ・ <寄稿>花巻人形に魅せられて
- ・ 報告 史跡・文化財巡り特別企画展
- ・ 指定文化財紹介⑬
- ・ 資料は語る⑬
- ・ となんの昔ばなし⑬

MAP☆ACCESS



○利用案内

- 開館時間 午前9時から
午後4時まで
- 入館料 無料
- 休館日 月曜日
(休日に当たるときは、
直近の平日)
年末年始

<寄稿>

花巻人形に魅せられて

盛岡市箱清水一丁目

小田 琢 磨

今回は、盛岡市箱清水在住の小田琢磨氏から、花巻人形について寄稿いただきました。

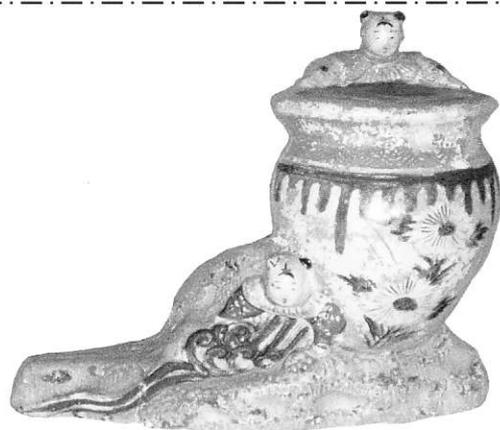
ひな祭り、端午の節句の時期が近づきますと、県内各地で花巻人形展が開かれます。「花巻人形ってなに？」とある展示会に足を運んだその日から、私は花巻人形に魅せられてしまいました。

私が初めて都南歴史民俗資料館をお邪魔したのは、今年のブリキのおもちゃ展のときでした。ブリキのおもちゃも見事でしたが、そのとき出会った常設展示されている花巻人形には、いやあ、驚きました。古色蒼然たるたくさんの花巻人形の逸品が鎮座していたからです。重ね塗られた彩色は大小剥落してはいるものの、時代を経て深みを増していました。蘇芳(すおう)の赤と群青(ぐんじょう)の鮮やかな色彩が退色して沈んだ様には、格別な美しさがありました。

花巻人形は花巻地方で製作された土人形ですが、幕末の文化文政の頃(1804~1829)が最盛期で、多くの製作者によって多くの型が作られ、多くの花巻人形が近郷一円ばかりでなく、研究書によりますと、南は一関、北は盛岡、西は山形の寒河江にまで売りさばかれたということです。都南歴史民俗資料館に展示されている人形は、その頃作られた作品のようです。花巻人形は、同じ土人形である伏見人形(京都)や堤人形(仙台)の影響を受けた古い歴史をもった人形ですが、単なる模倣の域にとどまらず、大胆にデフォルメされた形や鮮やかな色彩、花模様(梅、桜、牡丹)が大きな特徴とされています。

都南歴史民俗資料館には、源平・一ノ谷の戦いの「平敦盛」と「熊谷直実」、命の大切さを教える「温公かめ割り」、大横綱「谷風」などお馴染みの人形も展示されていましたが、これらの人形の背後にある語り継がれた説話や教訓を思えば、古い土人形が何かを語りかけているようにも感じます。人形を作った人々、買い求めた人々とともに、祈り、あこがれ、願いなどを人形に託して大事にしていきたいものだと思います。

その後、都南歴史民俗資料館に何度か足を運びました。花巻人形たちの前に立ちますと、時代への懐かしさ、地域へのいとおしさに導かれて、人形を作った人々と静かに心を交わす瞬間が生まれます。そして歴史民俗資料館は、資料の展示とともに心の文化を継承していく大切な役割を担っている施設なのだという思いにも至ります。



花巻人形「温公甕割り」(当館蔵)

学者でもあり政治家でもあった司馬温公(1019~1086)が七歳の時のお話。友だちの一人が誤って水の入った大きな甕(かめ)に落ちた。皆はあれよあれよと騒ぐだけ。その時、温公はいきなり甕を割って友だちを助けたという故事に基づく人形。甕は財産を表す大切な物。人の命はそれよりも尊いということを教えている。土人形では花巻人形だけでなく伏見人形、堤人形などにも同じ題材の人形がある。

報 告

9月28日

史跡・文化財巡り「歴史の街道散歩」
～盛岡ゆかりの歴史のみち～

今年度の第2回目の史跡・文化財巡りは、都南地区から盛岡市街地を通り、玉山地区のルートで行いました。当日は、午前中に雨が降りましたが、たくさんの寺院や施設の方から解説や資料をいただき、とても有意義な史跡・文化財巡りになりました。



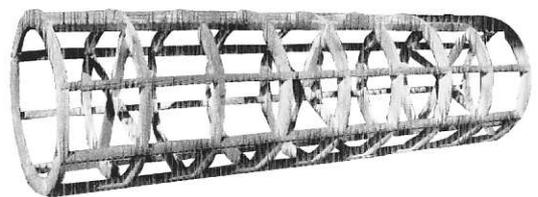
天昌寺

9月1日～9月30日

平成19年度特別企画展
「稲作と農機具」

今年度の特別企画展は「稲作と農機具」と題して開催され、昭和初期まで使用していた農機具や当時の稲作の様子を記録した写真パネルなど約120点を展示しました。

小学生から年配者までたくさんの方が見学者が訪れ、先人たちの苦勞を感じ、その知恵を再確認する良い機会になりました。



コロガシ (田植えのしるし付け道具)

盛岡市所在指定文化財紹介 ⑬

うえだいちりづか 県指定 史跡 上田一里塚

平成4年(1992)3月27日指定 盛岡市緑が丘4丁目地内

上田一里塚は、盛岡城下の鍛冶町一里塚から渋民に向かって、奥州道中を約4km北上した地点にあります。岩手県文書によると、大正11年当時、米内村に所属していたこの一里塚は、「盛岡ヨリ青森ニ通スル旧道ノ左右ニ相對シテ」存在していました。昭和初期まで2基あった塚のうち、東側のものは市街化の進展に伴って消滅していますが、西側の1基だけは上田修道院の敷地内にあったため、ほぼ円型に近い姿で残されていました。

市内に所在する指定された一里塚は、奥州道中、宮古街道、小本街道等で13か所が知られています。いずれも多くは山林の中にあるもので、上田一里塚のように、市街地の中にある例はまれです。現在は市でその敷地を公有化して、その保全に当たっています。



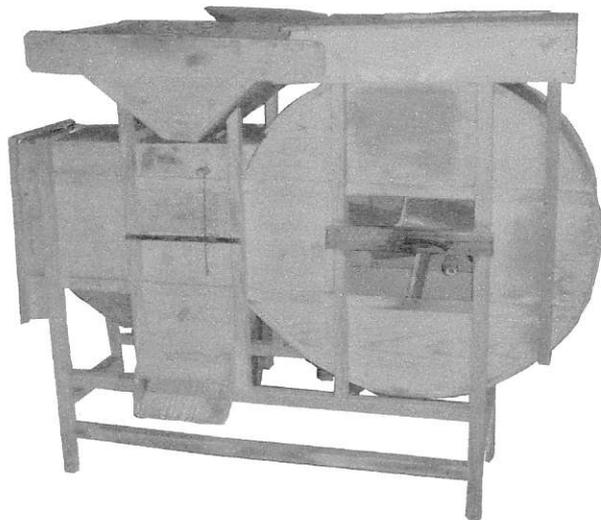
参考資料

盛岡市教育委員会

「盛岡の文化財」

1997

当資料館の収蔵資料をひとつ取り上げて紹介します



唐箕は、穀類を選別する道具です。脱穀（だっこく）した粳（もみ）に混入しているわら屑（くず）やごみ等、また、玄米中の屑米（くずまい）を風洞（ふうどう）の中の羽根を手回しハンドルにより回転させ、風の力で穀物を吹き分けます。風の力で穀物を選別することから、風選機ともいわれていました。昭和30年代まで全国各地で使用されていました。

参考・引用資料

田原虎次「稲作における農機具の変遷」農林水産技術会議事務局 1990

となんの昔ばなし⑬

『田中の薬師さん』

下飯岡の田中の「庄左衛門」という屋号の屋敷に薬師如来という高さ7センチほどの仏さまがまつられています。

今から三百年ほど前のこと、一人のみすぼらしい山伏が門にたおれていたの、なまけ深いそのおじいさんは助けてあげました。

山伏はある日、かぶとと刀を持ってきて、「このかぶとと刀は名のある方のものでしたが、その方も今はなくなってしまいました。」と、かぶとの守り仏であった小さい仏さまを出して、「この仏さまは薬師如来さまとって、耳病をなおしてくれる仏さまです。」とかぶとと刀をあげました。

このうわさが広がり、耳の病気の人は穴のあいた石をもって参拝するようになりました。

この家の姓は「浅沼」といって、四百年ほど前の昔、遠野の殿さまは「阿曾沼」といっていましたが、ほろんでしまい、その殿さまの一族が「浅沼」と姓をかえて、なんんかが飯岡に住み移ってきた、そのひとりの家といわれています。阿曾沼の殿さまの先祖は、栃木県安蘇郡浅沼村の人といえます。阿曾沼は頼朝から遠野あたりを軍功によりいただいたものです。

■出典『となんの民話』（都南歴史民俗資料館）